

梶井基次郎についての一考察

— 光より闇への傾斜 —

国 島 和 恵

はじめに

梶井基次郎は、光と影とを鋭く感受した作家である。ことに夜の闇については、終始感覺の牙えをみせている。

一因は、天折した作家の病いと療養生活にある。四囲が沈黙したとき、その闇の中で、不眠にさいなまれる頭脳が活動を始める。

「Kの昇天」「交尾」「瀨山の話」などで夜の舞台が放つ効果は独特である。彼の作品のあるものは、病床の催眠遊戯を取材し、隔絶された闇の世界での生命凝視を取材し、生命不安の声を取材し、光明を求めての焦燥を取材している。

ここに「冬の日」「冬の蠅」「闇の絵巻」の三編を選び、作中人物が光と影を意識したときの心情——人生への姿勢を表わしている——が、どういう推移をみせているかを考えてみた。前二編をとりあげたのは、この作品で、光と影にたいする意識が象徴にまで高められ、心情表現の具とせられ、感覺描写の域を越えているからである。作者自身、書簡中に「冬の日」を指して「私の云ってゐました象徴主義なるもの甚だ遅々ながら文中に發展していることを認めて

いただければ幸運です」と述べ、「冬の蠅」では「日の当った風景の象徴する幸福な感情」と述べている。また二編は、絶望の誓という意味で正統の關係にあると、中谷孝雄氏に評されてもいる。後一編をとりあげたのは、闇にたいする意識が主題の重要部分を占めると考えたからである。なお、三編の發表は次の通りになされた。

「冬の日」昭二「青空」二月号、四月号

「冬の蠅」昭三「創作月刊」五月号

「闇の絵巻」昭四「詩。現実」二号（九月刊）

冬 の 日

「冬の日」の葬は、肺を病み「生きる熱意をまるで感じなくなつてゐる」「一日一日が彼を引き摺つてゐるような人物である。自ら「俺の生きる道は、その冷静で自分の肉体や自分の生活が減び行くのを見てゐることだ」と語る。群を離れ、孤独のうちに、自己の内面を、生と死を酷なほど凝視しながら生きてゐる。やがて全てが失われることを予感し、失いたくないと願ひ、愛惜の痛みに耐えかねている。作者自身「悲しい小説です」と書簡に綴る通りである。

「冬の日」において光と影の関与する部分を考えると、光による幸福感の肯定、その光が失われてゆくことへの愛惜とかなしみ、薄暮の訪れによる絶望感の三項目に大別される。

まず光による幸福感を探ると、堯は、まれに早起きをした冬の午前
の道端で、明るい陽射しをあび「痴呆のやうな幸福だ」と思いつつ
「うつらうつら日溜りに屈まって」いる。脳裏を幸せな少年時代の
追憶がcaすめる。その夕、堯は電燈のともらない自分の下宿を外か
ら眺めて「あの窓の磨硝子が黄色い灯を滲ませれば、与えられた生
命に満足してゐる人間を部屋の中に、この通行人の心は想像するか
もしれない。その幸福を信じる力が起つて来るかもしれない」とつ
ぶやく。堯は生への情熱を失つた人間に設定されているが、まだ光
と、その象徴する幸福感を肯定している。反撥も違和感もなく、
光への憧憬をいだいている。

したがって、消えゆく日影を慕い愛惜する。心を燃やしてくれる
ものは美しく燃える浮雲である。堯は「速い地平へ落ちて行く太陽
の姿」に駆られ「大きな落日が見たい」と願ひ町をさまよう。切な
い心に落日の姿が写る。さらに、満たされない願望の胸に「屋根根の
上へのぼり、空へ手を伸ばしてゐる男を想像」する。心に映じた己
れの姿である。光へのはかない憧憬を意味している。堯は冬の日が
かげっていくときも「墨汁のやうな悔恨やいらだたしさ」が心に拡
がっていくのを覚える。減びゆく落日は、崩れゆく幸福の象徴であ
る。堯は自らの幸福を愛惜し、それが失われることに悔恨といらだ
たしさを覚える。「冬の蠅」の「私」も「冬の日」時代を回顧し
て、「私は毎日自分の窓の風景から消えてゆく日影に限りない愛惜
を持ってゐた」と語る。

こういふ堯にとって、薄暮の訪れは苦痛であり絶望を意味する。
夜になると「古い生活は死のやうな空気の中で停止する」からであ
る。堯は黄昏が訪れると「絶望に似た感情で怒を銷じる。」そして
「夜と名づけられた日陰」に「不思議ないらだち」を感じる。「今
日はもう日は見られない」と思うとき、「堯の心は明るくはならな
い」からである。日のないところに幸福を信じる力は起らないので
ある。薄暮の町では、自分の住んでいる親しい町すら、自分を拒む
かのような「暗愁」が心にかける。

一方、「暗愁」のうちに、「こういふ記憶が嘗ての自分にあつた
やうな、一種訝かしい甘美な気持」のひらめきも感じとる。この気
持は、次編「冬の蠅」の、闇に親しみたい衝動、黄昏を待つ心へと
展開してゆく。

冬 の 蠅

「冬の蠅」の「私」は、温泉宿で二た冬目の療養生活を送り「蠅
と日光浴をしている男」である。作者は東郷鴉ヶ島で大正十五年と
昭和二年の冬を過している。「都会へ帰る日取りは夙の昔に過ぎ
去つたまま、いまはその形も形もなくなつてゐる。」「冬の日」の
堯とちがひ、積極的に自らの生を否定する姿勢である。自分の生を
「何といふ倦怠、何といふ因循」とみなし「自らを殺す酷寒の中
の自由」を望んで「いつになつたらかうしたことに身がつくのか」と
吐息をつく。気まぐれな外出の後、自分の部屋の蠅がいなくなつた
ことに気付き「私にもなにか私を生かし、そしていつか私を殺して
しまふ気まぐれな条件」を意識し、陰鬱な生活を送らうとしている。
「冬の蠅」では、まず、消極的ながらも幸福への意志、光への愛
惜といった「冬の日」の心情が否定される。次いで新しく、薄暮を

待ちこがれる心、太陽への憎悪、闇の中でいづく情熱と安息感が設定される。

「私」は「冬の日」に相当する都会の冬至に間もない頃を回顧して「今の私には、もうそんな愛情はなかった」といい、影の訪れによる悔恨やいらだたしさも、落日に駆られたせつない心をも否定する。

否定だけではなく、自らを「日光浴をしながら太陽を憎んでゐる男」と呼び「日を浴びるときは太陽を憎むことばかり考へてゐる。「日に当りながら私の情熱はだんだん高まって」ゆき「平凡な日なた奴／早く消えろ」とつぶやく。太陽とは結局「私を生かさないうい」もの「生の幻覚で私を瞞さうとする」ものだからである。さらに、太陽を憎むとは、その象徴する幸福を憎むことである。「私は日の当った風景の象徴する幸福を否定するのではない。その幸福は今や私を傷つける。私はそれを憎む」という。日の当った風景が象徴する幸福には「感情の弛緩があり、神経の鈍麻があり、理性の偽瞞がある」と看破する。それゆえ幸福に傷つき憎むのである。「私」が欲するのは、偽瞞のない激しい充実感である。人は不幸なとき、他人の幸福にも傷つく。自らの不幸を新たに意識するからである。傷ついて、幸福感のもつ虚偽を鋭く感得する。逆説的にさえ見える。

また、太陽の与える肉体的不快感も憎悪の一因である。「日光浴の後の旺んになって来る血行、鈍麻してゆく頭脳」「鋭い悲哀を和らげ、ほかほかと心を怡ます快感は同時に重々苦ししい不快感である。」この不快感は虚無的な疲れで病人をうち敗かしてしまふ。

今や快いのは黄昏であり闇である。「以前とは反対に深淵を冷た

く沈ませてゆく夕方を——僅かの間しか地上に駐まらない黄昏の眩かな捷を——待つようになつてゐる。そこには「幸福ではないにしても、眼を澄ませ、心を遠き徹らせる風景がある」からである。

求めるものは、偽意をはらんだ虚偽の幸福感でなく、苛酷であろうとも、真実な情熱にみちた充実感である。彼は闇の中で自虐的な情熱に駆られる。彼はある日、気まぐれで外出先から帰らない。

自動車に乗って行き、行くにも帰るにも三里は歩かねばならない山の中に下りる。落日は山向うに沈み、夢のような静かさの中に「憂鬱な心細さ」を覚える。心細いということとは忌避すべきことではない。やがて夕闇がせまり、孤独な煙草の火を残して谷が暮れてしまおうとするとき、「あたりにまだ光があったときは、全く異つた感情で、私自身を襲撃して」しまふ。それは、闇と突風に勇氣づけられた「残酷な欲望」である。前途に光明を見出すことができないときの、極度の疲労と偽意が変じた「暗い情熱」である。「何といふ苦い絶望した風景であらう。私は私の運命そのままの四圍のなかに歩いてゐる。これは私の心そのままの姿であり、ここにゐて私は日なたのなかで感じるやうな何等の偽瞞をも感じない。私の神経は暗い行手に向つて張り切り、今や決然とした意志を感じる。なんといふそれは氣持のいいことだらう。定闘のやうな闘、盾を劈く酷寒。そのなかでこそ私の疲労は快く緊張し新らしい戦慄を感じる事が出来る。歩け。歩け。へたばるまで歩け。」この情熱は「終りまでその犠牲になり通さなければならぬ」ほど執拗である。暗い情熱に捉えられるのは、闇の山道でだけではない。行動には走らなくとも、夜の陰鬱な部屋で冥想するのは、考え得られるかぎりの残酷な自殺の方法であり、溺死体のようにぶくぶく浴槽の底に沈んだ己れ

の姿である。

闇の山道を絶望にかられて歩き通した果て、港の埠頭に立ったとき「憎悪に充ちた荒々しい心」は尽きている。彼は静かな海の闇に見入り、気疎い睡気のようなものに誘われる。陶然とした心の安らぎを覚える。闇と一体になり、たける心を失っている。「闇の絵巻」では、この闇への親しみ、愛が大きく扱われ讃えられる。

闇の絵巻

この作では、闇への愛が好ましい闇の風景を通して語られる。ある部分は叙景詩的、ある部分は心象風景として展開される。闇は「私」として象徴的である。「自分も暫らくすればあの男のやうに闇の中へ消えてゆく。」彼を待ちうける感傷で非情な世界の象徴である。描かれる闇の風景は「冬の蠅」における瘴癘地のそれである。書簡によると「冬の蠅」成立以前に「今『闇』といふ短編を書いてゐる。絶望に駆られた情熱、闇への情熱を書かうとしてゐる」とあり、淀野隆三氏により「闇の絵巻」の第一稿のことだと注が付けられている。しかし、作者が第一稿の「闇」で志した「絶望に駆られた情熱」は「冬の蠅」でかなり具体的に示されている。「闇の絵巻」を待つまでもない。「闇の絵巻」で新しく提起された主眼がおかれるのは、かなしいまで爽やかな闇の中の休息感である。

まず「滅びへの情熱」が説かれる。闇の中での第一歩には「絶望への情熱」が必要であることを認める。「苦液や不安や恐怖の感情で「ばいになった」闇の中の一歩を敢然と踏み出すためには「悪魔を呼び」「裸足で潮を踏んずける」絶望への情熱がなくてはならないのである。「冬の蠅」で語られた滅びへの情熱に同じい。ただ作品の性質上「冬の蠅」と違って、内から湧きおこる不可避の力とせ

ず、闇の第一歩のための必要条件としての情熱を観念的に想定している。この情熱に類似した心情描写は、後に好ましい闇の風景の中でも、二三描出されている。

ある夜、闇の道を歩いていた彼は、自分の前を行く一人の男が、明るみを背にして、闇の中にはいつていくのを見、自分も「あんな風に消えてゆくのであろう」という一種異様な感動を覚える。滅びの姿への感動である。この感動は「冬の蠅」と違い、行動への衝動を伴わない。静観的である。「冬の日」の蠅の「冷静」に通じるものがある。また、好ましい闇の風景の中で、崖を曲った「ひろびろとした展望」のある所まで来るといつも「私の心を占めてみた煮え切らない考へを振るい落してしまつたやうに感じ」「新しい決意が生れて来る。秘やかな情熱が静かに私を満して来る。」この決意と情熱が「冬の蠅」におけるやうに「私」をして夜道をさらに進ませるものであることは違いない。が、自滅への情熱・決意であるという、はっきりした条件づけはなされず「眼界といふものがかろうも人の心を変へてしまふものだらうか」といい、叙景に移り、絶望ということを強調しない。

この作品で強調されるのは、暗い情熱を超越したところに得られる闇への愛、闇の中の安息感である。「私」は「闇を愛する。」なぜなら、闇の中では「もしわれわれがさうした意志（滅びへの一歩を踏み出す意志）を捨ててしまふなら、なんとといふ深い安堵がわれわれを包んでくれるだらう」からである。丁度、停電のとき、最初は不快だが「一寸気を変へて陽気でゐてやれと思ふと同時に、その暗闇は、電燈の下では味はふことの出来ない爽やかな安息に変化してしまふ」その感情とよく似ている。この闇の中の安息や安堵

は何を意味するのか。それは「今は誰の眼からも隠れてしまった——今は巨大な闇と一如になってしまった」という感情である。今はすでに、嚴肅、非常の世界、やがて自分を呑み尽すであろう世界に消えてしまったという感情である。滅びへの意志も情熱も不要である。滅びそのもの、闇そのものと一如となった感情だからである。「私」には闇の山道が爽かで好ましく、都会の電燈の流れている夜は薄汚なく思われてならない。「冬の日」において、苦痛であり「死のやうな空気を滲えた忌わしい夜は、逆に、それゆえにこそ好ましいものとして肯定されている。

この好ましい闇の風景には、安息以外の心情も、点描される。夜道のあるところでは不安を感じ、電燈の灯が遠くなるのを見ると安堵が消える。逆に、街頭の一つの電燈が恐怖を呼ぶこともある。瞬間的には、このような不安・恐怖をいだくこともあるが、観念として闇の山道を想起するとき、一貫して、親しみ、安らぎの気持を喚起する闇という設定がなされている。

おわりに

以上三編の、光と影とが関与した心情の推移は次のように要約できる。

「冬の日」における心情は、それぞれ「冬の蠅」で否定される。すなはち、光による幸福感、光への愛惜の情は、太陽および幸福への憎悪によって否定される。薄暮の訪れによる絶望感、黄昏を待つて逸き徹る心にとって変る。新たに、闇の中でいだく執拗な滅びへの情熱が展開される。

「闇の絵巻」では、この滅びへの情熱を観念的に認め、また、それに近い心情を具体的な場において描出しているが、これを超脱し

た場合の心情を、新たに提起する。闇への愛、闇の中の安息感がそれである。

このように三編の中では、光（幸福）より闇（絶望）への傾斜をみることができる。

光より闇への傾斜を一気に下り、上京を決意した前後からの梶井基次郎は、闇への情熱から徐々に解放されつつあったようだと中谷孝雄氏は語る。確かに「のん気な患者」などには、こうヒステリックでない、土性骨の太さのような楽観のきざしがある。

この傾斜は何を意味しているのだろうか。単なる病者の自棄とみても、非凡を願う凡俗を厭った作家の奇をついた意図の現われとみても、一群の青年詩人に梶井とみても皮相すぎるようである。

「瀬山の話」のことは借ると、心の一方に存する「濁りたい気持」への傾きの一時期を示すのだろうか。瀬山の一方には「澄みたい気持」があり、他方には「濁りたい気持」がある。小悪魔はいつも後者に味方する。あらゆる祈願をこめ、前者に味方しても、もう単純には前者についていけないという。瀬山にはモデルがあるというが、その内面に梶井は己れの姿を見出したに違いない。

この傾斜の意義を出発点として、さらに梶井基次郎という作家を探りたいと願っている。

（高水高校教諭）